

研究成果を発信する(4) ～書評を通じた学術交流～

前号では、学術助成金の獲得についてお話ししましたが、最終回では図書を刊行した後のことに触れたいと思います。本が完成してまずやるべきことは、個人や学会への「献本」です。個人については、もちろん研究にあたってお世話になった人(同僚や上司、助言をくれた人、共同研究者、研究協力者など)には送りますが、私の場合、さらに「自分で買っては読んでくれないだろうけど、ぜひ目を通してほしい人」にも送ることにしています。例えばフランス教育の研究者であれば、献本しなくても新たな文献は一通り購入することが多いです。

自分が所属する学会に対しては、過去に論文掲載があるところを中心に送付します。これが「書評」(ここでは「図書紹介」等も含めた意味で使います)を書いてもらうことにつながります。書評は単に自分の本を会員に知ってもらうというだけでなく、批判も含めて専門的なコメントがもらえる貴重な学術交流の機会です。学会発表では質疑応答、論文投稿では査読を通じたフィードバックがありますが、図書の場合は書評が大きな役割を果たします。

1冊目の『フランスの学校教育におけるキャリア教育の成立と展開』のときには、5つの学会で書評が掲載されました。その中で私が特に印象的だったのは、日仏のキャリア教育・進路指導/orientationの概念の異動について十分に説明されていないのではないか、という指摘です。きわめて妥当かつ建設的な批判であり、さらなる研究の大きな原動力になりました。実際、2冊目の『現代キャリア教育システムの日仏比較研究』では、日仏におけるキャリア教育の位置関係の解明からスタートしました。こちらは現時点で、本学会を含む6つの学会で書評を書いていただいております、大変にありがたいことです。

少しだけ書評の内容に触れてみますが、学会誌『比較教育学研究』では、上述のように前著の課題に答えようとしていることを評価してもらいました。まるで著者の気持ちを見抜いたかのような文章を前にして、素直にうれしく思います。

『フランス教育学会紀要』では、「第4章 キャリア教育のアウトカム評価のしくみ」について多くの疑問が呈されました。特に私が真剣に受け止めたのは、PDCAサイクルやニュー・パブリック・マネジメントといったアングロサクソンの枠組みでフランスの実態を捉えており、教育文化の固有性を無視しているのではないかという指摘です。まさに痛いところを突いた、的を射た批判ではありますが、本章は多国間比較を目的とする共同研究の成果をもとにしています。比較するためには共通のフレームを設定する必要があり、各国の特殊性にこだわりすぎると比較できないというジレンマがあります。しかし、本書の一部として位置付けるにあたって、フレームの妥当性についてより丁寧に説明する必要があったかもしれません。次の研究につながる新たな課題です。

少し話がそれますが、この第4章は学会論文ではなく、全て紀要論文をベースに執筆しています。ときに煩わしいと感じてしまうこともある専門誌の厳しい査読ですが、そのありがたさ

(2023年3月掲載)

を改めてかみ締めました。第1回で言及したように、書きたいことを書けるのは本の「魅力」の1つですが、何でも書いてしまうという「怖さ」でもあります。

書評が表彰につながることもあります。私のケースだと1冊目について、日本産業教育学会(現・日本職業教育学会)の学会賞をいただきました。後日に聞いた話ですが、歴史社会学がご専門だった委員長から評価してもらったのは、メインのキャリア教育の展開史というよりも、ブルデュー社会学をうまく援用して考察した部分だったようです。実はブルデュー教育論は修士論文に該当する箇所、いわば挫折して博士課程で断念してしまったテーマです。まさか、ここが評価されるとは…。多様な研究分野によって異なる見方があり、だからこそ狭い意味での専門を越えて多くの人と交わる必要があるということを実感させられた出来事でした。

本学会でも、情報委員会が年に4回発行するニュースレターに書評が掲載されています。偶然にも、今年から情報委員長を務めることになりましたので、書評が本学会の多様性を活かした学术交流の場になるように、最大限努力したいと思っています。

さて、4回にわたって「本を書く」という研究成果の発信について、お話させていただきました。英語での論文執筆、国際ジャーナルへの投稿が重視される昨今の風潮ですが、単著を書いて交流するというのも人文・社会科学系の引き継ぐべき伝統ではないでしょうか。ぜひ多くの会員がチャレンジすることを願いつつ、私自身も次回作に向けて歩みを進めていきます。最後までお読みいただきまして、ありがとうございました。

(筑波大学人間系 京免 徹雄)